

高崎芸術劇場広報誌

劇場都市

vol **07**

2019 SUMMER
Takasaki City Theatre
Information Magazine
GEKIJOTOSHI

公益財団法人
高崎財団
The Takasaki Foundation

都市は劇場であり、劇場は都市である



MEET THE GSO

GUNMA SYMPHONY ORCHESTRA

群馬交響楽団
楽団員インタビュー

Vol.7

脈々と引き継がれる70年の群響サウンド
それを奏でる個性あふれるメンバーたち
楽団員を知れば群響がもっと好きになる

群馬交響楽団
セカンドヴァイオリン首席奏者

山本 はづき

やまもと はづき



リスクを恐れず挑戦する
——
巨匠たちの姿を見習いたい

「音が並んだだけの完璧な演奏はつまらない。そこを越えた向こうにあるもの。それが本番で出た時、心揺さぶられます」——敬愛する音楽家達、オーギュスタン・デュメイ、ギドン・クレメール、ゲルハルト・ボッセ。巨匠達の共通点は皆「リスクを恐れず挑戦し、良いものをつくり出す姿勢」だ。

🎻 ヴァイオリン少女からプロへ

小学校時代は「ヴァイオリンの練習か、ご飯を食べているか、学校に行っているかのいずれかだった」と笑顔で語る山本さん。芸大卒の先生の指導の下、セカンドヴァイオリン首席を担当。ハーモニイを感じられる喜びに目覚め、シンフォニーの世界へと歩み出した。

桐朋学園時代、国際コンクールの審査員ジョルジュ・パウクの誘いで英国へ留学。「演奏家として自分の出す音に責任を持って。なぜこの指使いなのか、自分で考えること」と徹底された。「あの二年間で大きく成長できた」と振り返る。帰国後、アンサンブル活動やジュニアオーケストラの指導を経て、「ブラームスの交響曲・全四曲を演奏したい」と群響へ入団した。

「今はYouTubeで弓使いまで研究できる時代。便利になった分、音の感覚までデジタル化しないか」と危惧し、曲のイメージをかき立てる「譜読み」の時間を大切にしている。

🎻 将棋と音楽と私

最近、趣味として小学校以来という将棋に夢中になっている。「駒の動き方はすぐに蘇りました。実家での父との対局に時間を忘れます」

一方、ヴァイオリンは限られた時間に集中して取り組む。早めに譜読みし、一度寝かせ、様々な表現方法を試みながら、理想の音へと仕上げていく。

「今日の公演よかったよ」。街角でその声を掛けられる高崎の音楽環境は、演奏家にとって優しく温かい。

今秋の高崎芸術劇場の完成は、演奏家にとっても刺激的だ。「ホールの響き方によって弾き方も変わる。技術をレベルアップさせて、新しい演奏に挑みたい」と前を向く。

「群響の音楽教室を経験している群馬の皆さん。私が将棋の楽しさを思い出したように、再び音楽を味わいに劇場にいらしてくださいね」

九月二十日、山本さんの新たな挑戦が「歓喜の歌」と共にスタートする。

Hazuki Yamamoto

- 出身 東京都
- 入団 2007年9月
- 最近の印象に残っている公演
第535回群響定期演奏会
オーギュスタン・デュメイ指揮
(2018.2.24)
- 好きなアーティスト
ギドン・クレメール
ジョルジュ・パウク
- 好きな楽曲
ブラームス「ホルン三重奏曲」